妙香山の観光

朝鮮民主主義人民共和国
外国文出版社
チュチェ111(2022)

妙香山の観光

朝鮮民主主義人民共和国
外国文出版社
チュチェ111(2022)

目　次

はじめに　>　1

概　観　>　2

妙香山の自然　4

遺跡と遺物　12

地下の名勝　18

登　山　>　24

上元洞地区　26

万瀑洞地区　50

香毘盧峰地区　82

千態洞　84

香毘盧峰　98

七星洞　104

ホテルと旅館　>　114

伝　説

青龍と九龍沼　／／　31
妙香山の青い鳥　／／　34
鳳伊金先達の妙香山見物　／／　40
五仙峰伝説　／／　47
3種の這い木と妙香山の天女　／／　58
檀君神話　／／　68
仙遊峰と解慕漱の伝説　／／　77
亀岩の群れ　／／　86

国際列車時刻表（平壌—丹東—北京）

列車番号	路線	曜　日	出発	到着
51列車	平壌—丹東	日、月、火、水、木、金、土	10:25	16:30
52列車	丹東—平壌	日、月、火、水、木、金、土	10:00	18:45
51列車	平壌—北京	月、水、木、土	10:10	08:30
52列車	北京—平壌	日、火、木、金	17:27	18:45

国際航空路時刻表

航路	航路番号	曜日/出発	曜日/到着
平壌—北京	JS151	火、土/08:50	火、土/09:50
	JS251	木/10:35	木/11:35
	JS151	月、金/09:00	月、金/10:00
北京—平壌	JS152	火、土/13:05	火、土/16:05
	JS252	木/14:00	木/17:00
	JS152	月、金/12:00	月、金/15:00
平壌—北京	CA122	月、金/15:20	月、金/18:15
北京—平壌	CA121	月、金/13:25	月、金/16:20
平壌—瀋陽	JS155	水、土/11:50	水、土/12:00
瀋陽—平壌	JS156	水、土/13:55	水、土/16:10
平壌—ウラジオストック	JS271	月、金/08:30	月、金/11:00
ウラジオストック—平壌	JS272	月、金/12:20	月、金/13:00

はじめに

　朝鮮半島の西北部に位置している妙香山（ミョヒャンサン）は朝鮮の名山の一つである。
　山容が妙を極め、雄壮な峰々のいずれもが馥郁たる香気を放っているとして妙香山と呼ばれている。
　妙香山は壮麗な景観に加えて1000年近くの歴史を持つ普賢寺をはじめ処々に多くの遺跡・遺物があり、さらにここには朝鮮人民の誇りである偉人称賛の宝庫国際親善展覧館があって、国内外から山を訪れる人たちは跡を絶たない。
　妙香山には古い昔から朝鮮人民の間で語り継がれてきた伝説も多い。
　本書は妙香山の名勝や古跡、それらにまつわる伝説などを紹介している。

概　観

妙香山は平安(ピョンアン)北道の香山(ヒャンサン)郡と球場(クジャン)郡、平安南道の寧遠(ニョンウォン)郡、慈江(チャガン)道の熙川(ヒチョン)市にまたがる広大な地域を占めている。

全山の面積は375平方キロ、周は120余キロメートルで、最高峰は海抜1909メートルである。

この山が妙香山と呼ばれるようになったのは、11世紀初めの頃からで、それ以前は塩州(延州)郡に属する山だとして延州山と呼ばれ、高麗時代の中頃からは山の岩々が格別に白く清らかだとして太白山とも呼ばれた。

妙香山は、先に開拓された香毘盧峰北側の熙川市の盤野谷(富興里)、園明谷(柳中里)、香川谷(香川里)の一帯を旧香山と呼び、後れて開拓された、普賢寺と国際親善展覧館がある渓谷の一帯を新香山と呼んでいる。

地域的概念では、新香山を内香山、球場郡及び寧遠郡一帯は外香山と呼ばれているが、妙香山と言えば普通風致が最もすぐれた新香山(妙香川渓谷)一帯を指している。

金剛山は天下の奇勝として、智異山は雄壮な山容をもって知られているが、妙香山は金剛山に劣らぬ奇勝に加えて雄壮さをも兼ね備えた名山として広く知られている。

古くから「8万4千峰」と呼ばれた雄壮な妙香山は、数々の奇峰と巨岩怪石、深い渓谷に峨々たる断崖、水晶のように澄んだ水とよろずの滝、うっそうと茂る樹林と涼しい夏の木陰、秋の目がさめるようなもみじ、冬の雪景色、それに鳥のさえずりと渓流のせせらぎが溶け合って人々の耳を楽しませ、いずこを眺めても絶佳絶景である。

先にも述べたように妙香山は朝鮮の名山の一つであるが、さらには朝鮮8景の一つに数えられてもいる。この名山に一歩足を踏み入れれば、いずれを問わず形勝の連続であるが、中でも特にすぐれた8カ所の絶景を指して妙香山8景と呼んでいる。

観光登山の地、参観地として立派に開発された妙香山には、平壌市妙香山登山少年団野営所、香毘盧峰踏査宿営所、香山ホテル、妙香山乾燥食品店、妙香山薬水場などの施設が揃っている。

山には、上元洞と万瀑洞及び香毘盧峰への登山コースが開かれており、それらのコースの処々には周囲の景色につり合った安全施設、休憩所、休憩亭などが備わっている。

香山ホテルから香山川に沿って1.5キロメートルほど上ると、探密峰の麓に国際親善展覧館がある。

鳥が飛び立つような形式の入母屋にはきれいな青瓦が敷かれ、淡紅色の下地に金日成(キムイルソン)花、金正日(キムジョンイル)花、モンラン(オオヤマレンゲ)を描いた丹青が施された国際親善展覧館は、1978年8月26日に開館した。

当館には世界の多くの国々の党及び国家首班、あまたの国際機関と革命組織、資本主義諸国の進歩的な政治人と各階層の人士から金日成主席と金正日国防委員長、金正恩(キムジョンウン)総書記に贈呈された贈り物の一部が展示されている。

妙香山の自然

地形と地質

妙香山は太古の昔からたびたび複雑な地殻変動と風化作用などを受けてきた。新生代新第三紀の地殻変動の際に清川江の渓谷など周辺の一帯が陥没し、その影響で妙香山は香毘盧峰をはじめ全般的に高く盛り上がり、渓谷はより深くなって今日に至った。

妙香山の地形は、最高峰の香毘盧峰を中心として、西方は清川江の岸、東方は大同江の岸まで大きな山脈が伸び、それ以外にも幾つもの山並みを持ち、それらの間の渓谷に発して妙香川、百嶺川、園明川などが流れている。

香毘盧峰から伸びた山脈には珍貴峰(1832メートル)、円満峰(1820メートル)、香炉峰(1599.6メートル)、五仙峰(1365メートル)、法王峰(1392メートル)などの峰々がそびえ、ホラン嶺から分かれた山脈には白山(1599メートル)、文筆峰(1530メートル)、王帽峰(1402.5メートル)、兄弟峰(1229メートル)などが連なりそびえている。

妙香山の岩石は清らかで美しいばかりでなく、格別に白く、岩質が均一である。それに水によく溶けない固い珪石を多く含んでいるので、岩が砕けて出来た粉末は清くて水に溶けず、岩の合間や谷を流れる渓流は常時澄んでいる。

気候

妙香山は高い峰々からなっているので、谷間には強風があまり吹かず、冬もかなり温暖で、大寒と小寒を含む１月の平均気温は－11.6℃、暑い8月の平均気温は23.7℃で低く、年平均気温は8.3℃である。

妙香山一帯は朝鮮では降雨量が多い地域に属している。けれども雨期であっても終日雨が降るような日は稀である。

普通午前中は一点の雲もなく晴れていても、午後になると、香毘盧峰一帯に雲が湧いて雨が降る場合が多い。

雨の後にはしばしば霧が立ち込める。年間の平均降水量は1300ミリメートル強であり、その60%が７～8月に降る。雨が多く降り、風が弱く、森林がうっそうと茂っている妙香山の大気の湿度は年平均75%である。

渓流と薬水

妙香山には、古来格別に清く澄んでいるとしてその名を持つ清川江に流入する幾つかの渓流と、妙香山薬水がある。

代表的な渓流は妙香川で、この川は妙香山の降仙峰の合間に端を発して香岩里に至り、ここで清川江に流れ込む。

長さ16.5キロメートル、流域面積は71.8平方キロである。

その他の比較的大きい川は、球場地区に属する外香山一帯から流れ出る百嶺川(長さ40.5キロメートル)、熙川地区に属する旧香山の盤野谷から流れ出るプソン川、園明谷から流れ出る園明川、香川谷から流れ出る真明川である。

妙香山薬水は、上元洞と万瀑洞の間を流れる妙香川の岸辺にある。

この薬水は水素炭酸カルシウムを主成分としている。ミネラルの含量は1657.42mg/ℓ、pHは5.8、水温は12.5℃で、慢性胃炎、胃・十二指腸潰瘍、慢性小・大腸炎、胆道炎、慢性膀胱炎、軽い糖尿病などの治療に効能がある。この薬水は人々の健康に良いばかりか、登山コースのかたわらにあるので、観光を楽しむ人たちの喉をうるおすうえでも喜ばれている。これを常時服用すれば、皮膚が美しく、柔らかくなる。

動植物

妙香山は、海抜500～900メートルの高さまでは松とクヌギが主な樹林をなしているが、それ以上1100メートルほどまではモンゴリナラ、シナノキ、コオノオレカンバなど広葉樹が多く、1400メートル付近までにはモミ、ハリモミ、エゾマツ、トウシラベのような亜寒帯性針葉樹が多い。

1800メートル以上の頂上付近にはミヤマビャクシン、ハイマツ、チョウセンネズコ、エゾシャクナゲ、クロマメなど高山植物が茂っている。

妙香山には薬草やヤマブドウ、サルナシなど野生の果実も非常に多い。

七星洞の谷間には万病に利くとして世によく知られている妙香山の野生人参、ヒカゲツルニンジン、五味子、トウキ、ナナカマド、ツルニンジンなども多い。

動植物の生息に有利な妙香山は、動物の分布も多様である。

哺乳類は30余種、鳥類は220余種、爬虫類と両生類は数十余種に達する。

妙香山には珍鳥や益鳥が多い。

220余種の鳥のかなり多くは渡り鳥である。

妙香山は春ともなれば、冬中群れをなして生息していたツグミ、カワラヒワ、キレンジャクなどが繁殖地に向かって飛び立ち、5月には妙香山の名高いブッポウソウが現れ、コウライウグイス、カッコウ、コイカルなどがやって来る。

万瀑洞には、ササゴイ、カワセミ、カワガラス、ウソ、ケアシノスリなど珍鳥が多く、香毘盧峰にはウグイス、キビタキ、ミヤマホオジロ、オナガなどが飛び交い、香毘盧峰の風致を際立たせている。

それに処々の渓流にはアユ、ニジマス、カマツカなど数十種の魚が生息している。他にも妙香山には数十種の両生類と昆虫が生息している。

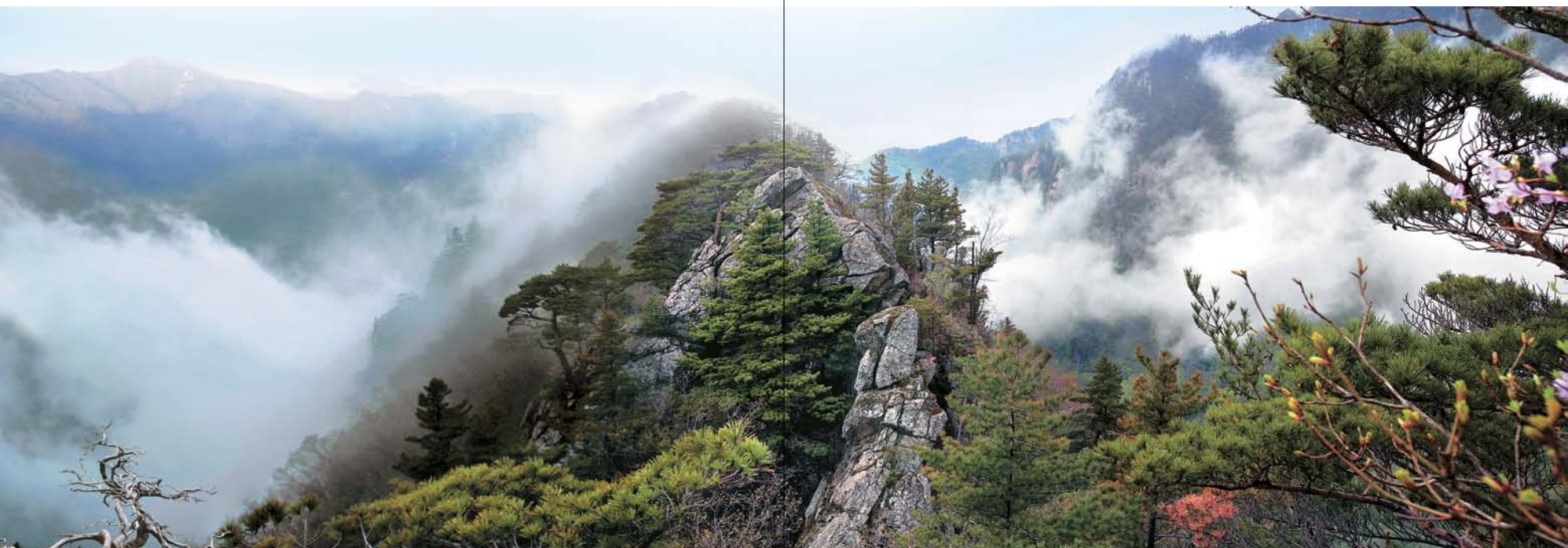
滝と奇岩

妙香山にはどの渓谷にも多くの滝がある。

規模の大きい有名な滝は40余を数えているが、その模様はさまざまで、水が垂直に落下する滝はもとより、亀の甲羅のような幅広い岩の表面を滑り落ちる滝もあれば、水しぶきを飛び散らしながら落ちる滝、岩壁を落ちる途中、噴水のように水が吹き上がって落ちる滝などと多種多様である。

妙香山には奇岩怪石が随所にあって、麗しくも雄壮な絶景を繰り広げている。

主に花崗片麻岩と花崗岩からなる妙香山には至る所に巨岩がそびえ立ち、それぞれが一つの巨大な岩の山のように見える。

天然の岩は1000年もの昔から青い苔に覆われているものもあるが、灰白色の柔らかい肌を見せているもの、頂に強く根を張った松の生えているものもある。

妙香山8景

深津亭まで出て
お客を送る

仏影台での月見

引虎台から見た滝

金剛潭の魚の見物

探密峰の緑陰

雪嶺台にたなびく雲

白雲台からのもみじ見物

檀君台の落陽

遺跡と遺物

妙香山には朝鮮人民の愛国的な闘争の物語を伝える遺跡や遺物が多い。

妙香山は、西山大師(1520～1604)が壬辰祖国戦争(1592～1598)の際に日本侵略軍を撃退すべく僧侶で義兵を起こした所として知られている。妙香山には、西山大師が若い頃道術の修業に励んで寝起きしたと言われる金剛窟と、義兵闘争を行った際に居住していた僧房が普賢寺に現状のまま保存されている。

妙香山には、壬辰祖国戦争当時朝鮮の重要な民族的古典である朝鮮封建王朝実録の一部が保管されていた仏影庵がある。

朝鮮封建王朝実録は、王朝が成立した1392年から滅亡するまでの500余年間の18万余日に起きた全国的な出来事を細大漏らさずに記録した朝鮮封建王朝の日誌である。

妙香山には朝鮮民族の英知と才能を示している遺跡が多い。

中でも普賢寺は11世紀初に造営された、当時の朝鮮の建築術を代表する芸術的に極めてすぐれた建物である。

国の遺跡・遺物保存政策によって大雄殿、万歳楼などの建物が原状通りに復元され、八万大蔵経保管庫が新設され、観音殿、霊山殿、解蔵院、万寿閣、曹渓門、解脱門、天王門、それに4角9重の塔、8角13重の塔、普賢寺碑などの石塔や碑石が保存されている。

八万大蔵経保管庫

観音殿

万歳楼

大雄殿と8角13重の塔

多宝塔

天王門と解脱門

楡岾寺の鐘

地下の名勝

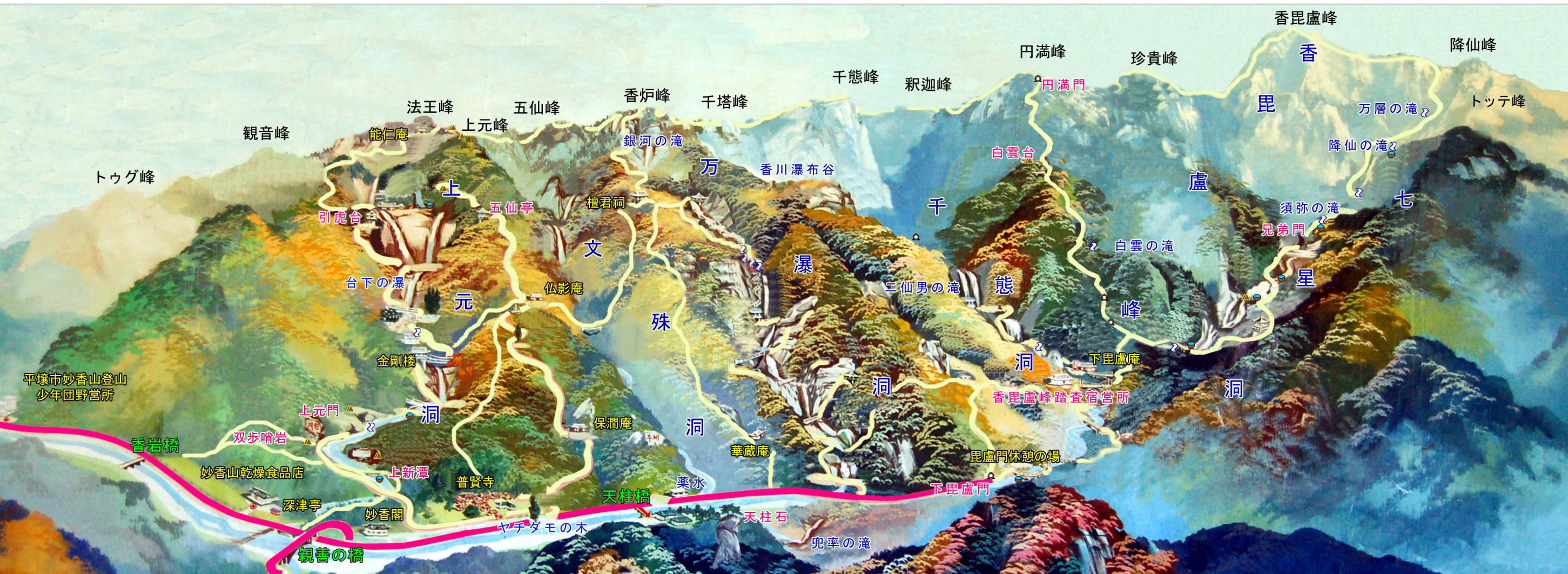
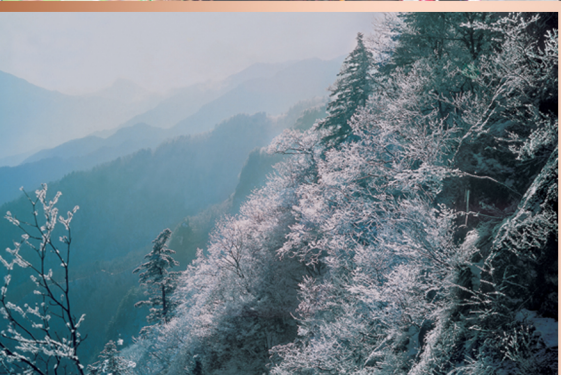
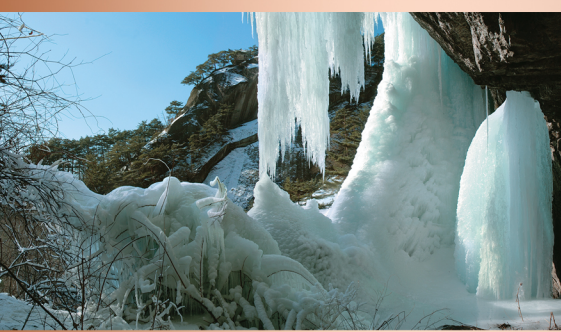
妙香山の外香山一帯(球場地区)には地下の名勝として知られている鐘乳洞が幾つかある。

これらの洞は長年にわたって地中の石灰岩層が雨水や地下水によって溶けて出来た洞で、天井からは千姿万態の鐘乳石が垂れ、床には石筍が林立して地下の名勝をなしている。

代表的な鐘乳洞は龍門大窟、百嶺大窟、松岩洞窟などである。

鍾乳石と石筍の一部

登山コース

香毘盧峰
降仙峰
円満峰
珍貴峰
千態峰
釈迦峰
香炉峰
千塔峰
法王峰
五仙峰
上元峰
観音峰
トゥグ峰
トッテ峰
円満門
万層の滝
降仙の滝
白雲台
能仁庵
銀河の滝
香川瀑布谷
須弥の滝
兄弟門
白雲の滝
引虎台
五仙亭
檀君祠
二仙男の滝
台下の瀑
仏影庵
金剛楼
下毘盧庵
香毘盧峰踏査宿営所
平壌市妙香山登山
少年団野営所
上元門
保潤庵
双歩哨岩
香岩橋
華蔵庵
毘盧門休憩の場
上新潭
普賢寺
薬水
妙香山乾燥食品店
天柱橋
下毘盧門
深津亭
天柱石
妙香閣
ヤチダモの木
兜率の滝
親善の橋
上元洞
文殊洞
万瀑洞
千態洞
毘盧峰
香毘盧洞
七星洞

登　山

妙香山の入り口には「妙香山」という金日成主席の親筆碑がある。

妙香山の登山コースは3通りである。

第1のコースは絶景の上元洞地区であり、第2のコースは特に滝の多いことで有名な万瀑洞地区、第3のコースは高山植物が香気を放つ香毘盧峰地区である。

香毘盧峰地区では千態洞、香毘盧峰、七星洞の3コースに分かれて登山することになる。

登山コースの入り口にはそれぞれ「上元庵」「万瀑洞」「香毘盧峰」と記された標識が立っている。

金日成主席の親筆碑

上元洞地区

この登山コースは登りと下りが別々である。登りは上元洞の入り口から上元庵を経て法王峰に至るコースである。上元洞の入り口から上元庵までは3.3キロメートル、上元庵から法王峰までは3キロメートルで、全長6.3キロメートルである。

この登りのコースにはさまざまな遺跡と滝、奇岩がある。

上元洞の下りのコースは法王峰から上元庵に下り、その近くの天神楼でしばらく休んだ後、祝聖殿、五仙亭、仏影庵を経て、金剛の滝を巡って下るコースである。

上元庵から仏影庵までは2キロメートル、仏影庵から金剛の滝までは0.97キロメートル、金剛の滝から上元洞の入り口までは1.8キロメートルである。このコースは上元洞へ登る道よりは険しくなく、斜面が緩やかなので、下るのは楽である。

上元洞の登りのコース

上元庵標識

上元洞に登る入り口に立っている。

観光ガイドの興味ある説明を聞くと、登山はいっそう楽しくなるであろう。

卒塔婆群

卒塔婆は僧の墓で、妙香山の僧が死ぬと死体を火葬に付し、舎利を埋葬してその地面に膨らみの円柱型に加工した石を立てたものである。

生前地位の高かった僧の灰を納めたものは甕のように大きく、地位の低かった僧のものは壷ほどの大きさである。ここには44基の卒塔婆があり、最大のものは高さ2メートルほどである。

卒塔婆群がある下手には安心寺があった。

1000数年前の1028年に黄海道黄州の住人金某が妙香山に入山して建てた寺で、この寺に参ればそのすべての人の心が安らかになるとして寺の名を安心寺と呼んだという。

彼は、自分がこの山の美を最初に発見したとして、自分の名を「探密」と変え、前方の峰を探密峰と呼んだ。

それから10年経った1038年、探密の甥クェンハクがここへやって来てその弟子になった。

2人は1042年までに243間の寺を建て、寺の名を普賢菩薩の名を取って普賢寺とした。

この妙香山の安心寺は1000余年の長きにわたって存在したが、すぐる祖国解放戦争の際、米空軍の爆撃で全焼し、壬辰祖国戦争の際僧兵を指揮した西山大師の卒塔婆と碑石も同時に破壊された。

卒塔婆群

普賢寺

上新潭

上新洞に新しく生じた淵だとして上新潭と呼ばれている。

双歩哨岩

上元洞を守る衛所のような岩が二つ並び立っているとして、双歩哨岩と呼ばれている。

古くから妙香山には金の仏像や釈迦の舎利など貴重な宝物が多かった。そのことを知った外敵がそれらを盗む機会をうかがっていたが、上元洞に住むある兄妹がこの双歩哨岩に住みついて道術を修業して妙香山と宝物を守ったという。

今も双歩哨岩は故郷を愛する兄妹の心を伝えている。

青龍岩

登山コースに立ちはだかっている岩を青龍岩と呼び、その長さは40メートル、厚さは５メートル内外である。

臥龍の滝

この滝は、１匹の龍が岩の斜面に横たわり、くねくねとのたうっているようだとして臥龍の滝と呼ばれている。長さは35メートルである。

雨期に水量が増すと、１匹の龍が谷間を這い上がっているかのように見える。

〔伝説〕

青龍と九龍沼

昔、龍淵の滝の滝壺に1匹の青龍が如意珠を守って棲んでいた。

四季常に乾くことなく流れる妙香山の水を満々とたたえたこの滝壺が緑色に輝いているのは、その水中に不思議な光を放つ如意珠があったからである。

この如意珠は道術を修めた龍が手にすれば変幻自在の妙を会得しうる神妙な珠だとされていたために、これを狙う龍が多かった。

ある日のこと。9匹の黄龍がこの滝壺を不意に襲い、上元洞の谷間で如意珠を守る青龍と9匹の黄龍は激しい戦いを繰り広げた。

黄龍は四方八方から入れ替わり立ち替わり襲い掛かったが、いくらあがいても妙香山の清い水を飲んで力を付け、道術を修めた青龍を打ち負かすことができず、遂に力が尽きて逃げ出した。

9匹の龍は、向こうの谷間に墜落して死に、そこに大きな窪みが出来た。

今日も黄龍が墜落して生じたこの九龍沼は当時の経緯を伝えている。

青龍は自分が守った龍淵の滝の清い水を飲みながら修業に励んでいるうちに、石になり固まってしまった。

上元門

上元門は40年余り前の雨期に、山腹の岩が転がり落ちて、下の岩の上に重なり、門の形になったものである。

上元門を通り抜けると、そこから妙香山の見事な景勝が広がる。

上元門

上新潭

上元の水の園

金剛門

金剛門

妙香山の真の景観はこの岩の門を通り抜けると始まるとして、遠い昔から金剛門と呼ばれている岩である。

以前、妙香山は長者や両班(貴族)、権勢家の遊興の地とされていた。

彼らは輿に乗り、笛や鼓の音にはやされながら山の見物に来るが、この小さな岩の門に阻まれて輿が通れなくなると、やむなく輿を降りてこの石門を通り抜けなければならなかった。

自分たちは王以外の誰の前でも腰を曲げるようなことはしないと尊大ぶっていながらも、この低い石門を腰をかがめて通らなければならないとこぼしながら、上元洞の景観を見逃してはとして、金剛門を苦しげにくぐり抜けたという。

上元の水の園

金剛門を抜けて50メートルほど進むと、そこに上元の水の園がある。

妙香山の空気と水が清く澄み切っていることに感嘆したある外国の実業家が妙香山を遊覧してみると、60余年の生涯に積もりに積もった疲労と公害の毒素がきれいさっぱりなくなったようだとして、この清い水と空気をビニール袋に入れて国へ帰って売れば、大金を儲けることができそうだと言った。

〔伝説〕

妙香山の青い鳥

遠い昔、妙香山に雌雄の青い鳥が住んでいた。

ところがこの一つがいの青い鳥は鳴き声がきれいでなく、羽も黒ずんで美しくなかったので、他の鳥から除け者扱いされていた。

けれども夫婦の青い鳥はそんなことにはかまわず、妙香山の花や木を丹念に手入れしていた。

ある日、この鳥の夫婦が熱心に害虫を捕っていた時、どこかから子どもの悲しげな泣き声が聞こえてきた。夫婦鳥がそこへ飛んでいってみると、10歳ほどの男の子が母親の病気の薬にとしてナマズを捕りに来たが、自分の力ではどうにもならないので泣いているのであった。

水には一度も入ったことのない鳥であったが、夫婦はなんとかその子を助けようとして、深い水の中へもぐり、どうにかしてやっとナマズを捕り、子どもに与えた。

喜ぶ子を見送った夫婦鳥はびっしょり濡れた自分たちの羽を見て、あれっと思った。

青黒かった羽が妙香山の水のように美しい真っ青な色に変わっていたのである。

夫婦鳥は喜びのあまり歓声を上げたが、その鳴き声もまた美しくなっていた。

それ以来青い夫婦鳥はその美しい羽と澄んだ鳴き声で妙香山を飾り、他の鳥を羨ましがらせた。

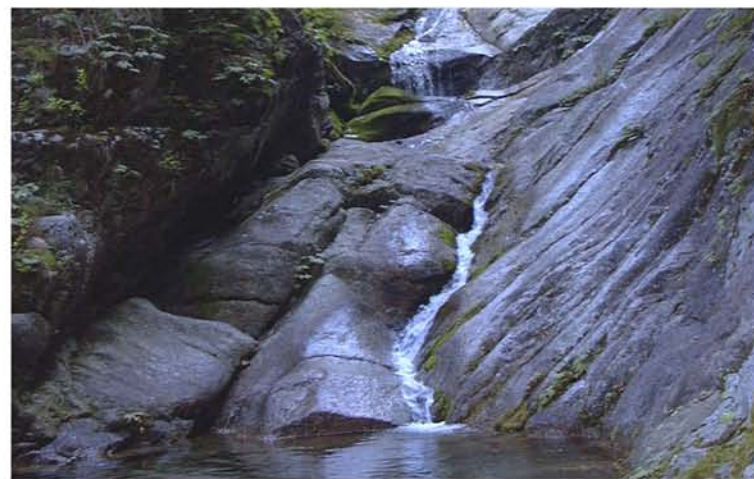
青い鳥夫婦の噂が広まると、各地に棲む青い鳥たちが競ってここへ飛んで来ては清く澄んだ水に体を浸し、みんな羽も鳴き声も美しくなった。

こうして多くの青い鳥が5月になると妙香山にやって来るようになったという。

金剛の滝

この滝は、その外観と周囲の景色がとりわけすぐれているとして金剛の滝と呼ばれている。

秋、もみじが全山を赤く彩る頃になると、カエデが枝を垂らした滝の風景は一幅の絵のようであり、冬、滝のふち一面に雪の花を咲かせた雪景色は格別である。

この滝は、普通に見られる滝のような、垂直の崖を落下するものではなく、傾斜した幅広い岩肌を滑り落ちる伏せ滝である。滝の左側の岩の上には鳥が飛び立つような入母屋造りの、優雅な丹青を施した金剛楼がある。この楼は休息用の建物で、ここからは眼下を流れ落ちる金剛の滝と周辺の景勝を一望のもとに眺めることができる。

金剛の滝

長指岩

親指を立てたこぶしのように見えるこの岩は、妙香山の景色が一番だと誇っているようだとして長指岩と呼ばれている。

こぶしの形をした岩の広さは5×5メートル、長指(拇指)の長さは2メートルである。

オヌイ池

双歩哨岩で道術の修業を行っていた兄妹(オヌイ)が水浴びをしたという池で、オヌイ(兄妹)池と呼ばれている。

上方の小池は妹が水浴びし、下方の大きい方の池では兄が水浴びをしたという。

珠玉の滝

珠玉のように清い水が流れ落ちるとして、珠玉の滝と呼ばれ、斜面を流れる長さは15メートル、淵の深さは2.2メートルである。

台下の滝

引虎台の下にある滝だとして台下の滝と呼ばれている。

この滝は、長い歳月流れ落ちているうちに崖が次第に削られて元来の位置から10メートルも後退したという。

滝の落ちる崖の中ほどに長円形の窪みがあり、水量の多い頃は落下する水がこの窪みにぶち当たり、噴水のように吹き上げられて壮快に散り落ちる。

龍淵の滝

この滝の上に上がった所に、龍淵と呼ばれる深い淵がある。ここへ流水がいったん入り込んでから水がぼこぼこ流れ出すのであるが、そのせいで、滝の表面が魚のうろこが広がっているような模様をなして落ちるのである。昔の人はこれを神秘視して、淵から龍が昇天し、その勢いで水がぼこぼこ流れ落ちているに違いないとして、龍淵の滝と呼んだという。

散珠の滝

数千数万の珠を散らしながら流れ落ちているようだとして、散珠の滝と呼ばれている。

洗心台

昔この岩壁に「南無阿弥陀仏」という文字が刻まれていたが、人々はここが自分たちの心を洗い清める場所だとして洗心台と呼んだ。

洗心台には昔、鳳伊金先達という人物が平壌の奥方連中を妙香山に連れ出してひと泡吹かせたという逸話がある。

オヌイ池

台下の滝

龍淵の滝

散珠の滝

龍淵亭

天神の滝

〔伝説〕

鳳伊金先達の妙香山見物

昔、平壌の両班や長者の奥方連中が暇つぶしに、金先達の口車に乗せられて妙香山の見物に出掛けた。

輿をかつぐ人夫だけでも数十名に達し、その前後を従僕たちが輿を守って歩き、さらにその後には仏への供え物を背負った人夫が続くというものものしさで、その豪勢な行列は人の目を驚かせた。

妙香山に到着すると、まず第1日目は普賢寺に参り、次の日は周辺の他の寺に参った。

3日目は上元庵へ登ることになったが、道が険しくて足にまめができ、みんなくたくたになった。

彼女たちは重い足をひきずってどうにかこうにか洗心台に到達した。

金先達は、この岩場は効験あらたかな洗心台であるが、みんな心を清くして登らないとあの高い崖の上から落ちて死ぬか片端になって一生苦労することになるから、ここで仏様にざんげしてお祈りをしなければと言った。

奥方たちは驚いた。

仏にお祈りをと思っても、これまでに犯した罪が一つや二つでなく、そのすべてをざんげせず黙っていたらすぐにも断崖から転落しそうに思えて、びくびくした。

そんな彼女たちの心中を知らぬわけのない金先達はまず、自分が寺子屋に通っていた幼い頃、人様の畑の瓜を一つ盗んで食べたことまで抜かすことなく全部吐き出して仏に祈った。

女たちはそんなことまでざんげすることになったら、自分たちは何日かかってもすべてをざんげできないと心配した。

すっかりざんげした金先達は、ここで祈った言葉の内容は誰にも聞かれないから心配せずにざんげをしなさいと言って、自分は洗心台の裏手に姿を隠した。

こうして一人ずつざんげを始めたが、彼女たちはわずかの金を貸してそれを返せなかった貧乏人の大事な子を下男にしてこき使ったことや、自分の夫が老いて面白くないとして若いツバメと楽しんだなどということまで、ことごとくざんげした。

ところがこのすべての内容が金先達の手帳に書きとめられているなどとは誰一人夢にも思わなかった。

この日、正直にざんげしたためか、一行は上元庵の見物を楽しんで無事に帰った。

金先達が両班、長者の奥方連中を妙香山の見物に誘った効果はすぐに表れた。彼は、この家、あの家をと毎日のように尋ね歩いては、金を出せ、米を出せと女あるじに迫った。

彼女たちが目をむいて拒むと、金先達はくだんの手帳を取り出してざんげした内容を読み上げた。驚愕した女たちは世間に知られたら大変なことになると青くなり、なかには私通の件がばらされたらどんな目に会うか分からないと恐れおののき、しぶしぶ要求を聞き入れた。

金先達はこうして手に入れた金や米を、大勢の貧しい人たちに分け与えたという。

引虎台

龍淵の滝の下から西北方へ崖の道を200メートルばかり上がると、引虎台がある。

引虎台の名は、昔上元庵へ向かって谷を上がっていた1人の旅人が龍淵の滝の下で道に迷い途方にくれていた時、１匹の虎が現れて崖へ上がる道を先に立って歩いて教えたという伝説にちなんだものである。

上元庵の真向かいの絶壁の上にそびえる引虎台には、休憩所の引虎亭がある。

引虎台に立って眺めると、上元庵が一幅の絵のように見える。

引虎台の絶景は古くから妙香山８景の一つと数えられている。

引虎台

上元庵

上元庵は背後に天神の滝が、前方には龍淵の滝と散珠の滝が下方に流れ落ちる絶壁の上に立っている。

上元庵は高麗(918～1392年)時代に建てられ、朝鮮封建王朝時代の1580年に修復されて現在に至っている。

上元庵は入母屋と切妻を組み合わせた形式の屋根を持ち、建物の正面には「上元庵」という扁額と「香山第一庵」という扁額がかかっている。

上元庵に付属して七星閣と水閣があり、上元庵の前には天然記念物の妙香山松と上元庵イチョウが立っている。

上元庵

上元洞の下りのコース

龍角石

上元庵の七星閣の裏手にあたかも龍の角のように見える岩があり、これを龍角石と呼んでいる。

龍淵に棲んでいた龍が天に昇る際に残したものだと伝えられている。

龍角石

祝聖殿

上元庵の龍角石の少し先にある寺である。

前側は柱を立てずに8.83メートルもの大梁が渡された特異な建物で、床に座っていても見晴らしがよく、風情ある住まいのような趣が漂っている。

祝聖殿は多様な彫刻と丹青で装飾されており、朝鮮封建王朝末期の建築術と丹青などの装飾技術がどのようなものであったかをよく示している。

万物台

妙香山の万物相と呼ばれている法王峰の絶景を一幅の絵のように眺望できるとして万物台と称されている。

ここからは、香毘盧峰と両側に連なる連峰のうちの一番高い法王峰がはるかに望まれ、法王峰の東側には五仙峰、西側には観音峰がそびえているのが見られる。

万物台

能仁庵

建築年代は明らかでないが、1780年代に増築されたこの能仁庵は、新香山地区にある建物のうちで最も高い位置にあり、斗組の彫刻と屋根の構造形式はユニークである。

能仁庵

法王峰

標高1392メートルの法王峰は、上元洞の主峰である。

法王峰の西方には朝鮮式の瓦屋が立ち並ぶ香山邑と、遠くの清川江の流れ、それにはるかその向こうの薬山東台が手に取るように眺望できる。

南方には文筆峰、カル峰、王帽峰、仙遊峰、卓旗峰、それに国際親善展覧館の裏山である探密峰とクェンハク峰が望見できる。近くには五仙峰がそびえ、その背後には香炉峰、千態峰、釈迦峰、円満峰が望まれる。

五仙峰と五仙亭

天界から降りてきた5人の神仙が妙香山の絶景に魅せられてそのまま石になって固まったという伝説がこもっているとして、この峰は五仙峰、その麓に立っている亭は五仙亭と呼ばれている。

〔伝説〕

五仙峰伝説

はるか遠い昔、天帝には目に入れても痛くないほどの可愛い娘がいた。

ある日、天帝は景色の麗しい、清い水が流れている名山に下りて遊びたいという娘の願いをかなえるべく、神仙たちに、下界で一番麗しい山はどこにあるかと聞いた。

彼らは下界には山が多く、川も多いが、景色がどの山よりもすぐれ、水も特に清い山は妙香山だと答えた。

天帝は若い1人の神仙を名指しして妙香山に降りて確かめてみるようにと言った。

ところが昼過ぎになっても帰ってこないので、今度は2人の神仙を送り出したが、彼らも戻ってこない。

翌日、年配の神仙2人をまた送ったが、これまた梨のつぶてである。

業を煮やした天帝は、自ら地上へ降りて行ってみた。

ところがなんと、5人の神仙はみな妙香山の絶景に見とれて立ち尽くしていた。

天帝は激怒して、大声で怒鳴りつけた。すると5人の神仙はそれぞれ立っていた位置で岩石に変わってしまった。

五仙峰はこうして生まれたという。

仏影庵

祝聖殿から五仙亭を経て下ると仏影庵が現れる。

南向きの仏刹仏影庵は一日中陽が入り、日が暮れると月光が差す。「仏影台の月見」は古くから妙香山８景の一つに数えられている。

仏影庵には1592年に起きた壬辰祖国戦争当時、国の貴重な文化遺産である朝鮮封建王朝実録が保管されていた。

万瀑洞地区

　万瀑洞はそこによろずの滝があるとして名づけられた深い谷の名である。
　登山コースは、バスの停留所から檀君窟までは登りが7.1キロメートルで、下りを合わせると往復14キロメートルほどである。
　このコースは入り口から九層の滝を経て檀君窟までの登りコースと、檀君台から華蔵庵を経て下るコースからなっている。
　この探勝コースはそれほど長くはないが、かなり険しい崖道を歩く。けれどもその間、いろいろの滝を見る面白味がある。飛仙の滝または九層の滝に至ると昼時になるので、普通九層の滝の前で休憩し、午後檀君窟を見てから華蔵庵を経て下山することになる。

万瀑洞の登りのコース

妙香山の薬水

妙香山の薬水は、普賢寺の曹溪門から香山ホテルの方向50メートルほどの所にある。

天柱石

天柱石は、万瀑洞へ向かう途中の右側にそびえている標高849.5メートルの卓旗峰の中腹にある奇岩で、天を支える柱のようだとしてこの名がある。

高さ43メートル、周30メートルもの円筒形の岩で馬の頭に似ており、近くで見ると、あたかも精巧な造りの巨大な塔を思わせる。

天柱石には、古朝鮮(B.C.30世紀初～B.C.108年)の始祖檀君が若い頃、香炉峰の中腹にある檀君台に立って、この天柱石を標的にして弓の練習をしたという伝説が残されており、またある偉丈夫が雨期に大石を手入れして雨を降らす天の穴を塞いで妙香山の美しい風致を守ったという伝説もある。

卓旗峰

普賢寺の前にある幾つかの峰を卓旗峰という。

卓旗峰という名は、その峰の形が旗が翻っているように見えるとしてそう呼ばれているのである。

河馬岩

幅20メートル、高さ6メートルの河馬岩は、昔妙香山見物にやって来た熱帯地方の河馬が、　仙遊峰と卓旗峰、兜率の滝の美しい景色に感嘆して開いた口を閉じることができず、そのまま石に固まってしまったとして名づけられた岩である。

序曲の滝

万瀑洞の入り口から左右に小松が密集している登山コースに沿って400メートルほど登ると、万瀑洞で最初に見られる序曲の滝に出遭う。

この滝には万瀑洞のよろずの滝が鳴り響かせている「交響曲」の序曲を奏でているようだとして、その名がある。

滝の高さは5.9メートル、長さは16メートルである。

下武陵の滝

武陵の滝の下方にあるとしてこう呼ばれている。

滝は小さいが、2条の筋をなして流れ落ちており、一つは勇敢・豪気な男性のように音高く落ち、他方の滝は静かな慎み深い女性のように音もなく流れ落ちている。

武陵の滝

序曲の滝の先250メートルほどの所にある。

昔、8人兄弟のきこりが仕事の合間にこの滝の前に集まって一休みしたという話が伝えられている。滝の眺めがとりわけ美しくて、桃の花が咲き乱れる武陵桃源のようだとして武陵の滝と呼ばれるようになった。

27メートルほどの斜面を流れた末、轟音を響かせて落下する壮快な滝である。

隠仙の滝

遠い昔、天から舞い降りて水浴びをしていた天女たちが、地上の若者たちが近くに現れるとここに身を隠したとして、隠仙の滝と呼ばれている。

狭い岩と岩の間を縫って水が流れ落ちる滝である。

万瀑台

万瀑台は、上元洞の引虎台に似て、ここに立てば万瀑洞の景観が一望の下に眺望できる。

万瀑台は隠仙の滝の100メートルほど先にある。

万瀑台の下側に天女が舞い降りて遊んだという遊仙の滝と八潭があり、西北方のかなたには空を突くような鳳頭陀という名の巨大な岩石の峰が望まれる。

さらに南側には卓旗峰と解慕漱伝説(B.C.15世紀に古朝鮮から分立して、B.C.12世紀以前に独自の古代国家となった扶余の建国にまつわる伝説)がこもる仙遊峰、それに王帽峰、文筆峰など妙香山の諸高峰が望まれる。

双岩の道

岩と岩の間にできている道だとして、双岩の道と呼ばれている。

昔、虹に乗って降りた天女たちもこの奇妙な道の珍しさに惹かれて、毎日のようにこの道を通って妙香山の景観を楽しんだという。

遊仙の滝

万瀑台を降りて200メートルほど谷を上がった所にある。

万瀑洞の八潭の上にあるこの滝には、天女たちが舞い降りて遊んだという伝説がある。全長がおよそ60メートルの遊仙の滝は、水が垂直に落下したり、斜面を矢のように滑り落ちたりして、下方に大小8個の淵を作っている。

滝の上には二つの崖を横切って長さ30メートルの遊仙橋が架かっている。ここから下の滝を見下ろすと、目がくらくらするほどである。

遊仙の滝には、妙香山の8天女ときこりの8兄弟が出遭って情を交わしたという伝説がある。

飛仙の滝

遊仙の滝から飛仙の滝までの距離はおよそ300メートルである。

この滝は、妙香山の多くの滝のうち垂直に落下する滝の典型とされており、奇妙な美しさで広く知られている。

遠い昔、万瀑洞に降りて遊んだ天女たちが、この滝にかかる虹に乗って天に上がったとしてこの名がある。

高さ46メートルの絶壁上から2条に分かれて落下しており、下から見上げると、上は両方とも樹木に覆われていて、あたかも天上に達した絶壁の上から滝が流れ落ちているのではと思えるほど壮快である。近寄って見ると滝のしぶきでそこに虹がかかっており、妙香山に降りていた天女たちが白い羽衣をなびかせながら、この虹に乗って天上に舞い上がっている姿を彷彿させる絶景である。

化粧の滝

この滝は、天女たちがここで化粧をしていたとして化粧の滝と呼ばれている。

落下する水が岩にぶつかってしぶきを上げる模様は、あたかも花びらが風に散るようだとして花状の滝とも表現されている。

高さ16メートルのこの滝は他の滝とは違い、自らの姿を現さず、狭い二つの崖の隙に沿って静かに落ちており、まるでうぶな娘のような趣である。

昇仙の滝

化粧の滝で身をやつした天女たちが滝の流れをさかのぼり天に舞い上がったとして、昇仙の滝と呼ばれている。

ふだんこの滝の水は岩の裂け目に沿って静かに流れているが、雨期に水量が増えると、流れる滝の水があたかも天女たちの羽衣が風になびいているかのように見える。斜面の長さは58メートル、高さは30メートルである。

九層の滝

九層の滝は飛仙の滝の1キロメートルほど先にある。

滝が傾斜の緩い九つの段をなす岩肌を流れ落ちているので、この名がある。

九層の滝は伏せ滝で、高さは99.2メートル、斜面の長さは294メートルで、銀河の滝に次ぐ大きな滝である。

40度以上の大斜面に沿って9回も段をなして流れ落ちる九層の滝は、滝の上に滝があり、淵の上に淵があり、それら個々の滝と淵がそれぞれ景勝を誇っており、それはよろずの滝の景観万瀑洞の縮小版だと言える。

エギの滝と七仙の滝

天の少女が水浴びをした滝だとしてエギ(少女)の滝と呼ばれている。

この滝には次のような伝説がある。

〔伝説〕

3種の這い木と
妙香山の天女

遠い昔、景勝の妙香山には大勢の天女が舞い降りて遊んだが、その中には誰よりも妙香山を愛している少女がいた。

少女は毎日のように妙香山に降りて、大きく育ったビャクシン、コノテガシワ、チョウセンゴヨウマツなどの木陰で憩い、羽衣が破れることにも気づかず、時間が経つのも忘れて遊んだ。

ところが、少女の破れた羽衣から放たれる香が天界にまで届き、そのことが天帝の耳に入った。

立腹した天帝は、それ以来天女に羽衣を着せることを禁じてしまった。8天女たちは妙香山に舞い降りることができなくなり、他方自分たちのせいで天女が罰せられたと知った3種の木は、すべて一斉に天高く伸ばしていたこずえを低めて、すべて地上に這わせてしまった。

そのことを知った天帝はいたく感動して、天女に羽衣を与えることを許した。

例の少女は、自分のために姉さんたちが罰を受けたことを悔やんで、それ以来妙香山に降りてもみんなと離れ、独りぼっちで水浴びをしたという。

こうしてそこに滝が生じ、その上側には少女の7人の姉が水浴びをした七仙の滝が別に生じた。

エギの滝の斜面の長さは8メートル、高さは5メートル、滝壺の深さは2メートルであり、七仙の滝の斜面の長さは35メートル、高さは22メートル、滝壺の深さは2.5メートルである。

ハイマツ

ミヤマビャクシン

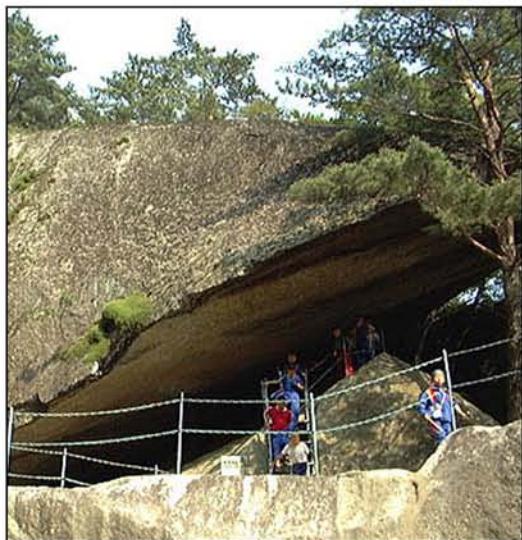
チョウセンネズコ

双岩の道

卓旗峰

兜率の滝

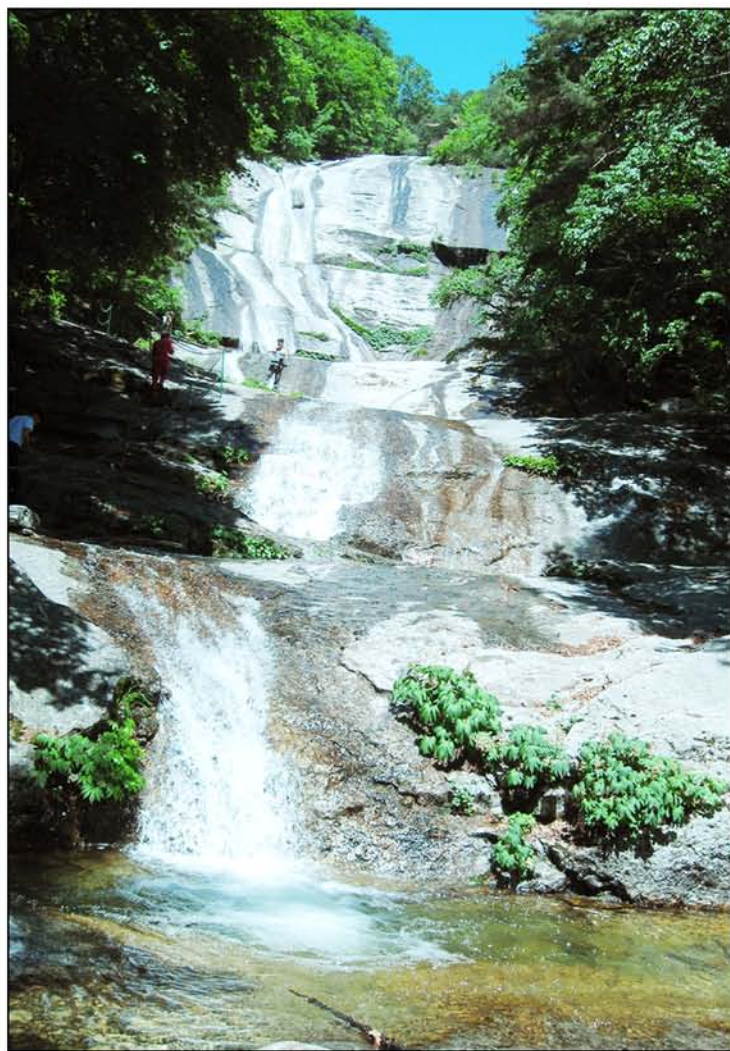
下武陵の滝

隠仙の滝

将帥岩

万瀑台

遊仙の滝

サラン潭

飛仙の滝

九層の滝

飛仙亭

飛仙台

万瀑洞の下りのコース

檀君窟と檀君祠

檀君窟は九層の滝の西側およそ1キロメートルの所にある。

檀君窟は幅16メートル、奥行き12メートル、高さ4メートルほどの洞である。

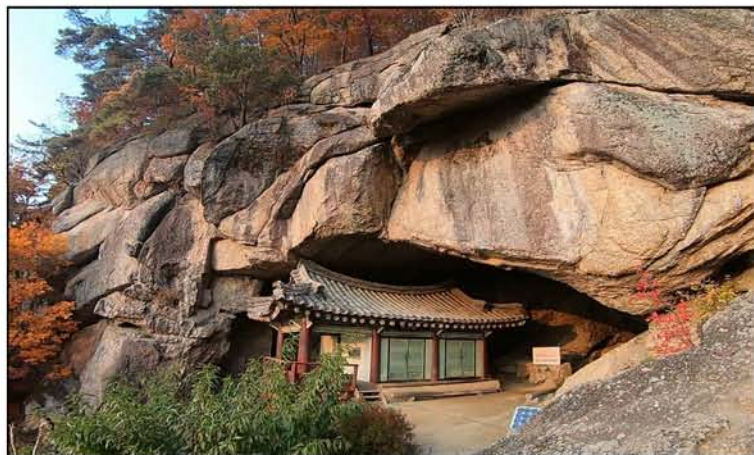
この天然の洞には、古朝鮮の始祖王檀君の伝説がこもっている。神話的な人物として伝えられていた檀君が、古朝鮮の始祖王であったことが実証されて、今や朝鮮の古代史は科学的に解明されている。

檀君を祀るために檀君窟内に造営された檀君祠には、檀君の肖像があり、祭祀用の石床が置かれている。

檀君台

檀君台は香炉峰の中腹にある。

昔から眺望がよいことで名のある檀君台に立てば、夕日を受けて赤く映える蒼然としてすこぶる美しい暮色を見ることができる。

檀君台には、檀君が毎日ここに上がって向こう側の卓旗峰の中腹に立つ天柱石を標的にして弓術の練習に励んだという伝説が伝わっている。

檀君窟と檀君祠

檀君台

〔伝説〕

檀君神話

香炉峰の中腹にある檀君窟には、朝鮮最初の国家古朝鮮の始祖王檀君についての伝説がこもっている。

昔、天界には桓因という名の天帝がいたが、彼には桓雄という庶子がいた。桓雄はつねづね、地上の世界に降りて暮らしたいと思っていた。

桓因は彼の希望を容れ、3000名の部下をつけて太白山に下ろした。

桓雄は風、雨、雲を司る官職を設けて、臣下にその任に就かせ、農事と生命、病気、刑罰、善悪の是非を正す役目を果たすようにした。

彼は人々の生活上ありうる360余種の仕事を統制しつつまつりごとを行い、民を治めた。

このように桓雄が太白山に降りて国を建て、地上の民を統治したとされた太白山は、今の妙香山である。

その頃、妙香山のある洞に一緒に暮らしていた虎と熊が、桓雄に自分たちを人間にならせてくれるようにと願い出た。

桓雄はその切願をよしとして、虎と熊にヨモギの一束とニンニク20粒を与え、「これを食べて100日間日の光を見なかったら人間になれるだろう」と言った。

虎と熊は桓雄の言葉通り、ヨモギとニンニクを食べて暗い洞の中に閉じこもった。ところが忍耐心に欠けた虎はわずか数日にして耐え切れなくなり、洞の外へ飛び出してしまった。

そのために虎は人間となれなかったが、足の裏をなめながら冬ごもりをすることに慣れている熊は桓雄から言われた通りにし、100日ならぬ21日目に美しい娘に生まれ変わった。

人間になった熊娘は桓雄につれあいを定めてほしいと懇願した。

ところが、その頃太白山には美しいこの娘に見合うほどの若者は見当たらず、桓雄はわが身を人間の姿に変えて娘としばらく同棲した。こうして彼女は子をはらみ、可愛い男児を産んだ。

この子がほかならぬ檀君である。

妙香山の清澄な空気と水を飲みながら育った檀君は、力が強く、しかも敏捷な若者に育ち、石窟の上の広い平岩の上で来る日も来る日も剣術と弓術の修練に励み、秀でた武芸を身につけた。この平岩は檀君台と呼ばれている。

檀君窟から香炉峰の方へ少し上がると、桓雄が天界に戻る時、そこから昇天したとされる登天窟がある。

妙香山にはこのように古朝鮮の建国者檀君に関する伝説が多い。

銀河の滝

九層の滝から探勝コースに沿って1.5キロメートルほどの距離にあるこの銀河の滝は、空に流れる天の川に似ているとしてこの名がある。

釜岩

釜岩は中天門から銀河の滝に至るコースの途上にある。

高さ1.2メートル、径2メートルほどの釜岩は、上が平坦で下部は丸くなっており、大きな岩の上に釜を掛けてあるような趣で、そのように名づけられている。

中天門

檀君台から50メートルほど登山コースに沿って登った所にある天然の石門である。

この石門は、左側の絶壁とその横の岩に数百キログラムもの大岩が挟まれて門のようになっている。高さは2メートル、幅は1メートルほどである。

中天門の模様は、万瀑洞の景色が損なわれてはと案じて息せき切って駆けつけた妙香山の大熊が、頭を押し込んで落ちてくる岩を支えたまま岩になって固まったような姿をしている。

明鏡台

明鏡台は中天門から三層の滝の方へ120メートルほど上がった所にある。

高さ10メートル強、幅15メートル内外の明鏡台は、その名にちなむ伝説の内容からして、世に広く知られている金剛山の明鏡台と別に変わるところはないが、外観は異なる。

明鏡台には、人間がその前に立てば、心の善悪が映し出されるという伝説がある。

カクシ岩

この岩は中天門から文殊の滝に向かうコース上にある。

カクシ(花嫁)岩という名は、岩の外観が黒色のチマをはいている女性の姿に似ているとしてつけられたものである。

高さは100メートル内外、幅は80メートルほどである。

釜　岩

中天門

明鏡台

段々岩

カクシ岩

文殊岩

この岩は三層の滝から100メートルほどの距離にある絶壁の岩で、長さは20メートルほど、高さ15メートルほどの奇岩である。

その姿が文殊菩薩に似ているとして、そう呼ばれている。

文殊岩

二段の滝

二段の滝は、文殊岩から香炉峰の方へ300メートルほど登った所にある。

1段目の滝は高さ1.8メートル、2段目の滝は高さ2.3メートルほどである。

滝の両側は絶壁と奇岩からなり、段々模様の滝壁を伝わって清い水が流れ落ちている。滝の下には青く澄んだ淵がある。しとやかで素朴な感じの漂うこの滝の風景は一見に値する。

二段の滝

文殊の滝

文殊の滝

文殊岩から70～80メートルほど上ると、長くも広い平岩の上を滑るようにして流れ落ちる文殊の滝がある。

この滝は伏せ滝で、長さは15メートルほどである。水量が増す雨期には、岩全体を覆って壮快に流れ落ちる。

文殊の滝の下には周13メートル、深さ約1.5メートルの文殊潭があり、文殊の滝の景観を引き立てている。

三層の滝

三層の滝

三層からなるこの滝は、文殊の滝から香炉峰の方向130メートルほど登った所にある。

全長は6メートルほどで、最初の段の滝は0.8メートル、2番目の滝は2メートル、3番目の滝は2.5メートルほどである。

仙遊峰

卓旗峰の東側にある仙遊峰は、昔、天女たちが降りて遊んだ峰だという。

五つの峰が並ぶ仙遊峰の上に立つと、奇勝や名所を一望のもとに見渡すことができる。

華蔵庵

普賢寺の東側4キロメートルの場所にある華蔵庵は、1654年に建てられたが、その後数度にわたって修築され、現在の建物は1818年に建て直されたものである。

華蔵庵は座禅の修業をする僧侶のための庵とは異なり、仏教の経典、ひいては儒教関係の文字をも教えていた建物で、ユニークな建築形式を持つ華麗な建物である。

華蔵庵

〔伝説〕

仙遊峰と解慕漱の伝説

卓旗峰の東側にそびえるこの仙遊峰には、朝鮮の古代国家の一つである扶余を建てたという解慕漱の伝説がこもっている。

天帝の子解慕漱は5匹の竜が引く車に乗り、100余人の部下を引き連れて地上に降りたが、最初に降りた所が雄心山(今日の妙香山)だという。

妙香山の仙遊峰に降りた解慕漱はある日、優渤水(今日の球場郡百嶺川)の岸辺で竜王の娘柳花に出会って妻とし、優渤水の川辺に銅の宮殿を建てて幸せな生活を営むことになった。

ところが、このことを知った柳花の父河伯が憤慨して、娘と解慕漱を竜宮に呼んだ。

解慕漱は、自分は天帝の子だとして、柳花と暮らすことを許してほしいと言った。河伯は、天の子にふさわしい神妙な才能があれば許そうとして、解慕漱と力比べをした。

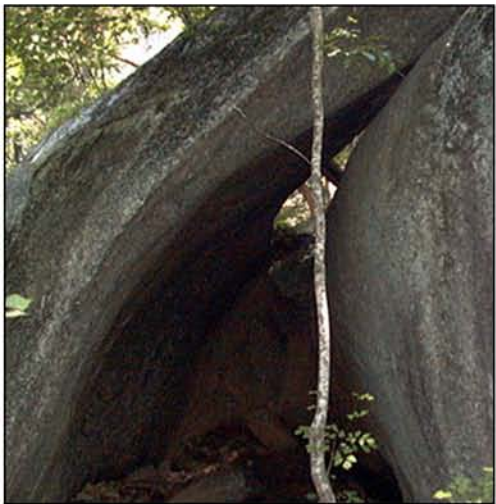
河伯が鯉に姿を変えると、解慕漱はカワウソに変わり、河伯が鹿に変わると解慕漱は狼に姿を変えた。河伯はたちどころに自分を脅かす解慕漱の神技に感嘆して、竜宮で婚礼を挙げ、ここで暮らすようにと言った。ところが、解慕漱は竜宮で暮らすわけにいかず、柳花を残して天に帰ってしまった。河伯は激怒し、柳花が竜宮の名誉を傷つけたとして優渤水に流してしまった。

仮檀君窟

この洞は、檀君窟の南側斜面に沿って150メートルほど下がった所にある。

二つの大岩が頭突きをしているかのような形をした仮檀君窟は、奥行きが3メートルほどで内部は三角形をなしている。

この洞には、以前檀君の祭祀を行うべく妙香山に寧辺府使がやって来た時、輿かきたちが、檀君窟まで上って行くのがおっくうで、この洞を檀君窟だとごまかした。

寧辺府使は彼らの言葉を信じてここで祭祀を行った。彼はその後も本物の檀君窟がその近くにあることを知らず生涯だまされ続けたという。

仮檀君窟

虹　岩

虹岩

この岩は万瀑洞の下りのコース上最初に出くわす奇岩で、昔天女たちがここを利用して天界から降りたり、天界に昇ったりした、虹のように見える岩だとして、虹岩と呼ばれている。

虹岩は、長さ30メートル、幅5メートル、厚さ2メートルで、岩天井の高さは1メートル内外である。

香炉峰

峰の模様が香炉のようだとして香炉峰と呼ばれる。

香炉峰は妙香山の主峰香毘盧峰から西側に伸びた屋根にそびえる海抜1599メートルの峰で、峰に登れば地面に這っているミヤマビャクシン、ハイマツ、チョウセンネズコなどの香気が漂い、ほかにクロマメ、エゾシャクナゲなども見られる。

香炉峰

戒助庵

この庵は卓旗峰と親善峰(探密峰)の中間右側の山の麓にある。戒助庵は普賢寺の住持以下僧たちに法名を与えたり、寺内で持ち上がる重要問題に訓戒を垂れたりしていた本寺の元老が起居していた建物である。

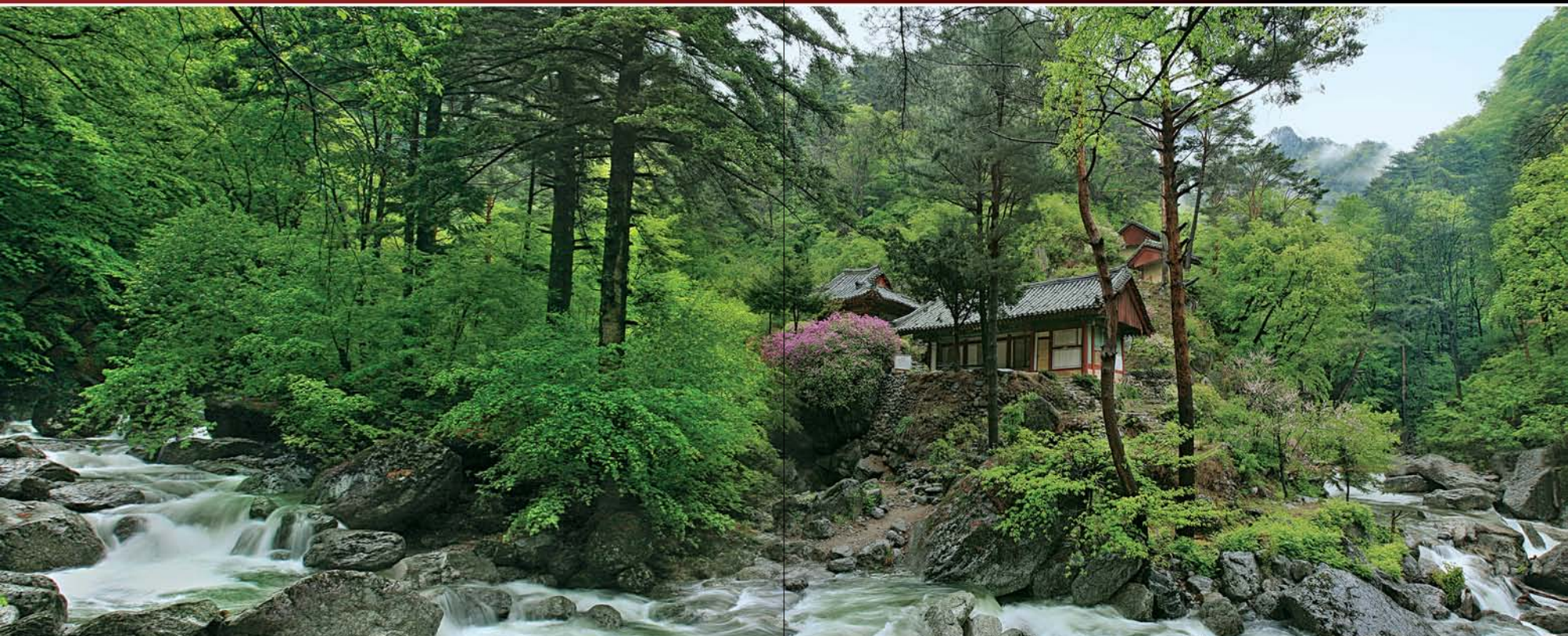
戒助庵

香毘盧峰地区

　このコースは千態洞の渓谷を見て歩いた後、白雲台を経て香毘盧峰に登って同じ道を下るか、或いは香毘盧峰から七星洞への道を通って下りるようになっている。

　香毘盧峰から下毘盧庵まで下りた後、金剛窟を経てさらに少し下ると毘盧門休憩所がある。

　香毘盧峰の登山コースには、千態洞、七星洞、香毘盧峰への三つのコースがある。

　登山の距離は、毘盧門休憩所を起点にして、千態洞の二仙男の滝までは3.5キロメートル、七星洞の七星峰までは10.5キロメートル、香毘盧峰までは6.5キロメートルである。

千態洞

毘盧門休憩所

香毘盧峰へ登る入り口にあるので毘盧門休憩所と呼ばれている。

毘盧門休憩所は最高峰の香毘盧峰と七星峰、降仙峰の渓谷の水が合わさるので年中水量が多く、絶勝の地である。

三千潭

この淵は古くから三千里錦の山河と呼ばれている朝鮮半島の地形に似ているとして三千潭と呼ばれている。

ある年のこと、国際親善展覧館の参観を終えた一外国人が、昼食を取ろうとしてここへ下りてきた。

三千潭の景観に魅せられた彼は、食事をすることも忘れて、この最初の入り口から早くも絶景が始まる妙香山はどんなに美しいことだろうか、あの清い三千潭で一度水浴びをするだけでも10年は若返るだろうと言った。

三千潭の長さは33メートル、幅は13メートル、深さは5メートルである。

三千潭

亀岩

毘盧門休憩所から三景台へ向かうコースを50メートルほど行くと、大小二つの亀岩が200メートルほどの間隔で立っている。

頭を持ち上げて何かを眺めている格好の亀岩は、竜王の指示でウサギを捕りに陸へやって来たが、それが果たせず、竜王の怒りを買って、淡水の亀になったという伝説を思わせる。

この二つの亀岩には、海で300年を生きた夫婦亀が子亀たちが引き留めるのを振り切り妙香山の見物にやって来て、妙香山の美しさにうっとりとして帰ることを忘れて岩になってしまったという伝説がこもっている。

〔伝説〕

亀岩の群れ

遠い昔、朝鮮西海に住んでいた亀の夫婦が、300歳の誕生日を前にして妙香山の見物にやって来た。

妙香山の神秘境にひきつけられ、帰ることを忘れて遊覧していた亀の夫婦は、自分たちの誕生日も忘れていた。

亀の夫婦は子亀たちが妙香山に迎えに来て初めて誕生日が過ぎてしまったと知ったが、この世の何にも増して美しい景色を見た喜びで少しも後悔しなかった。

夫婦亀はわが子たちに、余生をここで過ごすつもりだからお前たちは帰るようにと言った。

妙香山の景観に感動し、親亀の自慢話も聞いた子亀たちは、自分たちも妙香山に残ると言った。

こうして亀の家族はみな妙香山に残り、澄んだ清い空気と水を飲みながらいつまでも幸せに暮らしているうちに、岩になってしまったという。

オシドリ岩

オシドリは雌雄の仲がよく、いつも一緒にいる鳥として知られている。

ところが妙香山には1羽のオシドリだけが残っている。

オシドリは水辺に棲んでいるが、産卵期には水の流れをさかのぼって渓谷に入り、中がうつろになった木の幹などに卵を産むという。

妙香山のオシドリ夫婦は、産卵期に巣を移すことにした。

話し合った末、雄はまず千態洞の谷に入り、適当な場所を選んだ上で雌を連れてくることにして出発した。

雄は妙香山に到着すると、山の景観に惹かれ、首を長くして待っている雌のことを忘れてしまった。

こうして雄はここで無情なオシドリ岩になってしまったという。

下毘盧門

三景台

神仙台

はるかな昔、降仙台で景勝を楽しんだ神仙たちがここへ降りてきて、軽快な流水の音を聞きそよ風に吹かれて休息したとして神仙台と呼ばれている。

昔、神仙台は天人だけの休息の場とされ、ここで山の風景を楽しんだものだが、今日では二仙男の滝を見にやって来る人たちが妙香山の天女、天男となって楽しい憩いのひとときを過ごしている。

三景台

三景台は、妙香山の秀麗な山の景色、美しい岩の景色、水晶のように澄んだ青い水景色を楽しむ場所である。

チョマ岩

長さ15メートル、幅5メートルほどのこの岩は、瓦葺き家の軒のようだとしてチョマ(軒)岩と呼ばれており、登山客たちの炊飯の場として利用されている。

下毘盧庵

妙香山の主峰香毘盧峰を上、中、下に分けた、一番下側にある庵だとして下毘盧庵と呼んでいる。

下毘盧庵は、普賢寺の6キロメートルほど先の千態洞と七星洞から流れてくる渓流が落ち合う地点の小高い平岩の上にある。

この庵は17世紀以前に建てられたが、1882年に改築された、特別な装飾のない素朴な住居形式の建物である。

下毘盧庵のそばには普連台、山神閣、七星閣など付属の建物があり、その前には天然記念物イチイの木がある。

序川の滝

千態洞に入りながら初めて見る滝だとして序川の滝と呼ばれている。

千態の滝

千態洞の谷にあるとして千態の滝と呼ばれているこの滝は、下毘盧庵の先370メートルほどの所にある。

幅がおよそ25メートルの幅広い岩の斜面を滑って流れ、40メートルの高さから落下する滝の下には、深さ5メートル以上の滝壺がある。滝の左側には地中に深く根を下ろした巨岩があり、その上に奇妙な形をした一本松が立っている。

二仙男の滝

千態の滝の上方およそ150メートル離れた位置に二仙男の滝がある。

二仙男の滝は、水量が少ない季節には、仲の良い兄弟のように2条に分かれて流れ落ちている。

高さ22メートルの二仙男の滝の周りには、絶壁と巨岩

下毘盧庵

二仙男の滝と滝壺

がそびえ、それらの上には奇妙な形をした幾つもの松が立っている。空中で水煙を放ちながら七色の虹を作る二仙男の滝は絶景そのものである。

冷泉谷

この谷間は夏期に特に涼しい風が吹いてくるとして、冷泉谷と呼ばれている。

下毘盧庵から金剛窟へ向かうコースの200メートルほど先の所にある。

その名の通りこの谷間は常に冷たく涼しい風が吹き、暑い夏にも扇風機の前に立っているような感じがする。

金剛窟と金剛庵

下毘盧庵から西北方2キロメートルほどの距離にある金剛窟は、大きな岩の下に出来ている洞窟で、高さは3メートル、奥行きは10メートル、幅は13メートルである。

この洞には巧妙な建築の金剛庵がある。

高麗時代の末期に建てられた金剛庵はたいそう小さく、洞の上を覆う大岩を屋根代わりにして建てられた珍しい形の庵である。西山大師が40余年間ここで寝起きして修業したという有名な建物である。

ここにはすぐる1950年代の祖国解放戦争当時、『八万大蔵経』が保管されていた。

上には天人が舞い降りて美しい景色を楽しんだという降仙台があり、岩の下には目を明るくするという泉の明眼水がある。

明眼水

明眼水は、金剛窟の東側15メートルほどの所にある大岩の下に湧いている泉である。

高さおよそ10余メートルの大岩の下に湧く清く澄んだ泉は、四季涸れることがない。金剛窟で長年生活した西山大師はこの水を飲んで身心を鍛えたという。

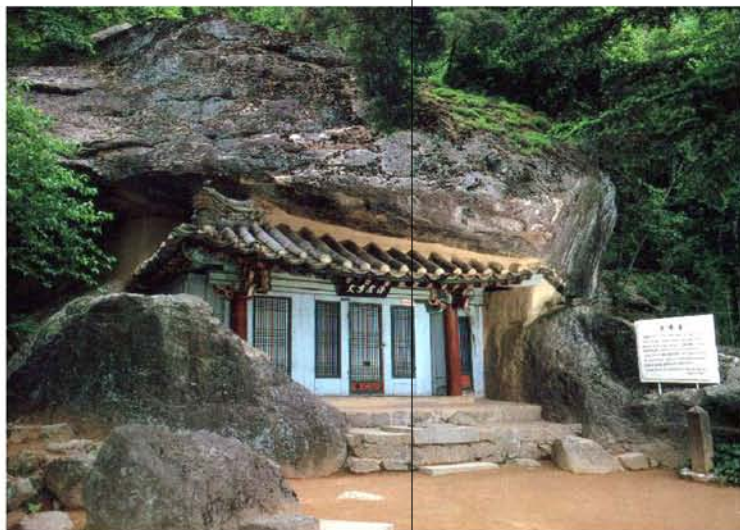
この泉には昔、一少年が明眼水を飲んで眼病を治したという伝説がある。

降仙台

金剛窟から山の尾根沿いに200～300メートル上がると降仙台に達する。

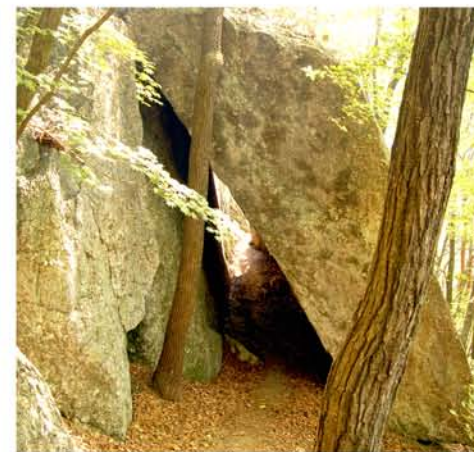
明眼水

降仙台

冷泉谷

金剛庵と金剛窟

白雲台

円満門

円満峰

白雲門

千態峰

釈迦峰

白教師窟

千態の滝

香毘盧峰

香毘盧峰踏査宿営所から香毘盧峰までの距離は6.5キロメートルである。香毘盧峰登山コースは、白雲台と円満峰、珍貴峰を経て最高峰の香毘盧峰へと続く。

白雲亭

白雲亭に至ると天上薬水がある。

昔の人たちは美味なこの水を飲むために中毘盧に登り、眼下に雲を眺めるべく白雲台に上がると言ったものである。

白雲窟と白雲門

白雲窟は、白雲台への登山コースにあるとしてこう呼ばれている。香毘盧峰への登山コースでは、高山地帯の特性で不時に雨に遭うが、そんな時はこの白雲窟が雨宿りの場所になる。

白雲窟の入り口の高さは1.7メートル、奥行きは10メートル、幅は2.5メートルである。

ここで鉄製の階段を上がると、奇妙な形をした白雲門がある。白雲門は長さ10メートル、高さ6メートル、幅3メートルである。

白雲台

白雲台は、妙香山の連峰を望見するのに最適のすばらしい展望台で、円満峰へ登る途上にある。

白雲台は非常に高い所にあり、白雲を中腹になびかせてそびえる岩だとして、この名がある。

円満門

円満門は、3角形模様のトンネルのような石門であるが、円満峰へ登る際は必ず通過しなければならない。

長さは40メートル、幅は2.5メートル、高さは2メートルである。

円満峰

海抜1825メートルの円満峰は、妙香山の4番目に高い峰である。

中毘盧の白雲台から2キロメートルほど登ると円満峰に達する。

円満峰の頂上は、10人余りが座れるほどの平らな岩からなっており、南西側は切り立った崖である。

天上門

天界に上がる時に通らなければならない門だとして天上門と呼ばれているこの石門は、円満峰の真下にある。

うっそうたる樹林を背景にして高くそびえる天上門を通って、雲に覆われた下方の谷間を眺めていると、雲の上から虹を伝って妙香山に降りたり、天に昇ったりしたという天女たちの足跡をたどって天界へ登っているような思いにとらわれる。

千塔峰

海抜1557メートルの千塔峰は、香炉峰から香毘盧峰の方に500メートルほど離れた所にある峰である。

昔、香炉峰に登った人たちが登山の形見として積んでおいた大小の石が一千個をも超えるとしてこの名がある。

千塔峰にはエゾマツやトウシラベが生えており、この一帯だけに見られるという固有のチョウセンイワウチワやヒカゲノカズラなど特産の植物が分布しており、100里(日本の10里)の先までも香気を放つというヒャクリコウで覆われている。

千態峰

千塔峰と円満峰の間にそそり立つ海抜1722メートルのこの千態峰は、ハイマツやミヤマビャクシンなど高山地帯の植物を持って特異な光景を広げている。

珍貴峰

円満峰から香毘盧峰までの2キロメートルの区間に長く横たわる珍貴峰の標高は1832メートルである。

珍貴峰とは、峰の頂上あたりに珍しい貴重な高山植物が特別に多く茂っているとしてつけられた名である。

この峰には野生人参、ヒカゲツルニンジンなどの薬草が多い。

香毘盧峰

海抜1909メートルの香毘盧峰は、朝鮮西北地方の最高峰である。

この峰の頂に立てば、数千数万もの峰が競い立つ雄壮秀麗な、奇妙を極めた山勢を形づくっている妙香山の絶景が絵巻のように望まれる。

香毘盧峰にはミヤマビャクシン、チョウセンネズコ、ハイマツの樹林が数十ヘクタールも広がっている。5月の末にはエゾシャクナゲが花を咲かせ、8月頃にはクロマメの実が実るなど、高山地帯の特異な植物の様相が見られる。

香毘盧峰跳躍台

天上門

珍貴峰

文筆峰

香毘盧峰

七星洞

七星洞登山コースには獅子の滝や七星の滝など大小の滝をはじめ名所が多い。香毘盧峰踏査宿営所から七星峰までの距離は9キロメートルである。

水晶沼

この淵は、水が水晶のように澄んでいるとして水晶沼と呼ばれている。

七星川の大量の清い水が高さ30メートルもの崖の溝を伝わってこの淵に流れ込む模様はまさに天下の景観である。

鯨岩

海に棲むクジラのような形をしているとして鯨岩と呼ばれているこの岩には、次のような伝説がある。

遠い昔、妙香山にやって来た海亀が300年を生きたという話を聞いた鯨は、自分も長生きしたいと思い、巨大な体をやっと動かして妙香山に這い上がった。山の入り口からしてその美しさに魅せられてあちこちを見て回り、一休みしようとして止まった所が七星洞の谷間であった。

喉の渇きを癒そうとして水晶沼の澄んだ水を一口飲んだところ、その味が驚くほど旨い。

景色の美しさもすばらしいが、水の味もまた格別にせいせいとして、海の水とは比べようもなく旨いのである。

欲の深いクジラはこの水を全部持って帰りたかったが、そうはいかないので、ここで思う存分飲んで行くことにしてがぶがぶ飲み始めた。ところが余りに多く飲んだせいで、体が動かなくなってしまい、岩に固まってしまったという。

パンアの滝

この滝は、水車を回す水流のようだとして、パンア(水車)の滝と呼ばれている。

七星洞で最初に見ることになる海抜710メートルの崖の上から流れ落ちるこの滝の長さは10メートル、高さは7メートルである。

万景の滝

ここでよろずの景色が見られる滝だとして万景の滝と呼ばれている。

滝の下側には万景沼が連なっている。

緋緞の滝

絹布を敷いたような美しさだとして緋緞の滝と呼ばれている。

七星峰を背景にして2筋の水が岩の斜面を滑って流れ落ちる滝である。

滝の高さは15.9メートル、斜面の長さは34.7メートル、幅は3メートルである。万景の滝が150メートルほど隔たった所にある。

獅子の滝

下毘盧庵からこの獅子の滝までの距離は2キロメートルであり、滝の高さは12.7メートル、幅は5メートル、長さはおよそ69メートルである。

水をかぶった獅子が頭を振りながら咆哮するような模様だとして獅子の滝と呼ばれている。

水の流れは7筋に分かれて段をなす岩の斜面を流れ、滝の下には数十頭の獅子が水浴びをしたという獅子沼がある。

銀糸の滝

獅子の滝を見た後、すばらしい渓谷美を展開する登山コースに沿って50メートルほど登ると高さ10余メートルの銀糸の滝に至る。

銀の糸を垂らしたような模様で流れるとしてこの名がある。

滝の下に銀糸沼と呼ばれる淵があり、長さ40メートル、幅40メートル、深さ2.5メートルもの大きな淵で景色も格別に美しい。

麝香の池

幅25メートル、長さ20メートル、深さ2メートルの麝香の池は、妙香山の名物ジャコウジカが下りてきて水浴びをした所だとしてこう呼んでいる。

七星沼

七星洞渓谷の中で最大の淵の一つで、幅5メートル、長さ50メートル、深さ8メートルである。

兄弟門と七星岩

兄弟のように並んで立っているとして兄弟門と呼んでいる。

兄弟門を潜り抜けると四季涸れることのない麝香泉がある。

奇妙な造りの兄弟門の100メートルほど先に苔に覆われた七星岩がある。

七星の滝

この滝は七星峰の下方の岩の斜面を流れ落ちるとして七星の滝と呼ばれている。

海抜1072メートルの高い渓谷にあるこの滝の高さは36.6メートル、幅は12.3メートル、長さは83メートルである。

滝の下には深さ3メートル内外の3角形の滝壷が三つある。

七降峡谷

この谷は、七星峰と降仙峰の間にあるので七降峡谷と呼ばれている。

妙香山が現在の高さにそびえ始めた頃の地殻変動で形成された。

峡谷の長さはおよそ900メートルである。

鷲岩

七降の滝と七降峡谷の間にあるこの鷲岩は、円満峰または珍貴峰の上からはっきりと望見できる。

鷲岩の高さは30～40メートルで、鋭いくちばしと、まさに飛び立たんとする羽などの細部にわたり生きている鷲を思わせている。

この岩には壬辰祖国戦争当時、西山大師が飛翔する鷲を矢で射落とすことで、殺生を禁ずる仏教の戒律を破ってはとして動揺していた僧たちを力づけて、日本侵略軍との戦いに決起させたという伝説がこもっている。

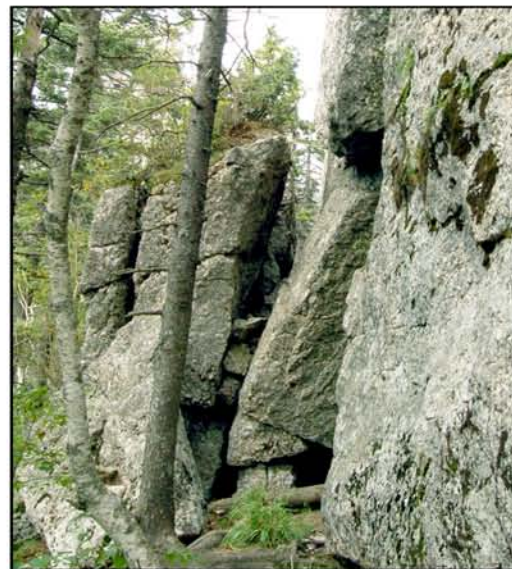
七降の滝

七星峰と降仙峰の間にあるとして七降の滝と呼ばれている。

海抜1300メートルの高さにある。

七星峰

七つの峰が連なって北斗七星のような模様をしているとして、七星峰と呼ばれている峰々で、最高の峰は海抜1894メートルである。

鯨岩

狭道岩

パンアの滝

獅子沼と獅子の滝

緋緞の滝

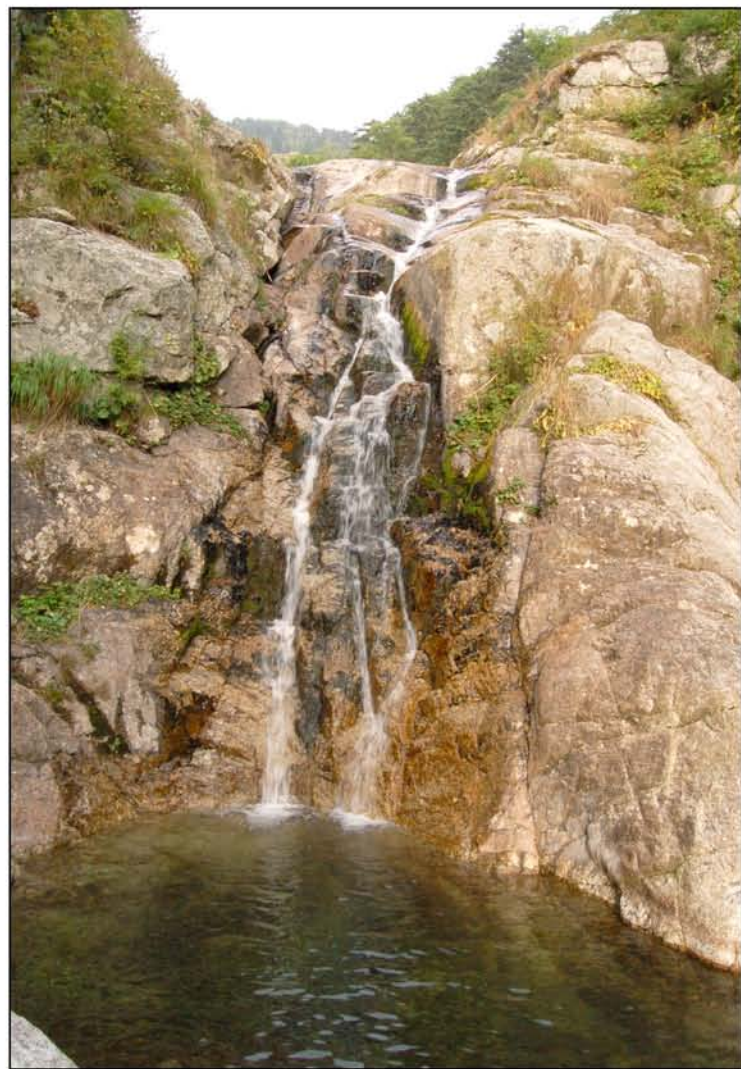
銀糸の滝と銀糸潭

麝香の池

七星沼と竜水の滝

万景の滝と万景沼

兄弟門

須弥の滝と須弥沼

降仙の滝と降仙沼

ホテルと旅館

香山ホテル

奇妙な形の峰々と太古の樹林の広がる妙香山を背景にして清い妙香山のほとりに立つ香山ホテルは、すがすがしい空気に包まれて神秘な情趣をかもしている。2010年2月に改築された。

15階建てのホテルは、妙香山の秀麗な自然がホテルの内部と巧みに調和し、建築の造形化、芸術化が見事に実現した、ピラミッド型の建築物である。

屋外食堂

休憩ホール

中央ホール

記念品店

ホテルには各国料理を専門とする幾つもの食堂、回転食堂、カラオケルーム、美容室、マッサージ室をはじめ諸種のサービス施設が備わっている。ホテルには観望エレベーターもあり、観望台に立てば妙香山の風致を望見できる。

妙香山の特産であるタラノキの若芽、ワラビ、オタカラコウなどの山菜とニジマスの料理は有名である。

ホテルのサービスは上々である。

回転食堂

ビリヤード場

特等室

一等室

二等室

三等室

清川旅館

妙香山の観光者用ホテル。香山邑を流れる清川江のほとりにある。

妙香山の自然の美を生かして内部が装飾されており、品のよい部屋や食堂は特に印象的である。

清川旅館と中央ホール

香毘盧峰踏査宿営所

三景台から150メートルほど上った所にある。

うわぐすりを塗って焼いた瓦葺きの朝鮮式入母屋の建築物であるこの宿営所は、香毘盧峰に登るハイカーたちが千態洞を踏査した後、ここで一晩宿営して香毘盧峰へ向かうことになる。

香毘盧峰踏査宿営所

妙香山の観光

執　筆：金仁国
編　集：朴成日
翻　訳：金時習　金光哲
発　行：朝鮮民主主義人民共和国
　　　　外国文出版社
発行日：チュチェ111(2022)年5月

E-mail: flph@star-co.net.kp
http://www.korean-books.com.kp

朝鮮6大名山

白頭山、金剛山、妙香山、

七宝山、九月山、智異山